

一名
農家
深云

農家
調寶
記續
錄
完

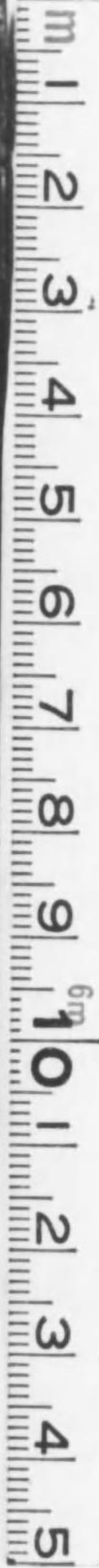
特279

特279-266



1200501132178

第
千
百
四
號



始



大藏永常著

江戸横山街
書肆玉巖堂

農家調寶記續錄 全

一名豐稼錄

此書は稻と仰て掛干すする仕方を記したるものなり其の利益を考へて先づ
おの由天ととも標とて稲本に掛て干す葉の移れ米にありて食入り
おのふに米八九升ハ収れりや儀米に出つるに備て自米するに減すなり
ふたふ種て乾めり酒米はてつたれり賣て死すなり稲を食ふに
稲をいほて肥するなるは米のいほて肥するもの必具すんが有へり

特279
266

豊稼錄序



黄金萬貫不可瘡飢白玉千箱何能
救冷誠哉言乎夫食者天下之本也
救古昔有祈年祭其事已權輿
崇神之朝其来也尚矣田者不彊
围倉不盈得相不彊功烈不成富國
彊兵之道亦不外于此矣大藏龜翁

嘗著農書數部頃除蝗錄成亦
復嗣刻此書龜翁者老農也可
謂深計熟慮而後行之者學問之
美實因耒耜之用生豈可不勤哉文
政丙戌中秋山崎美成識



豐稼錄 全

大藏永常一著

夫稻ハ百穀乃長なり是ニ作事ハ農家子一乃
急務ナリ一何國ハ農夫トシテハ心以盡一思ハ
を盡一一粒たりとも益何人トハ工更ニ作事至
らざるナラズ一それハ年頃志ス所トシテモ一それハ
別ニ徳分の所スル根も亦多トシテ其業乃利方ナ
リトシテ又思ハクハ存利ヲ多クシトシテ種々

の農家小てをる不乃業成心付見了小縮六刈て掛干
 にす色ハ赤一収米多く米乃性よく播て減りすく
 ちく虫付事考く其外莫志の得ふ者しと之る
 事成浪美乃西市園新田なる長おける成徳に
 小母人まゆく志く三ヶ年試りく右小考如くその
 下の米小浪をを村より移し米乃艶出米賣成
 るもよくをりじハ何ゆるもりあんと可い米又毎日
 此事とあしくはれ六四五米をばばとて其をり村

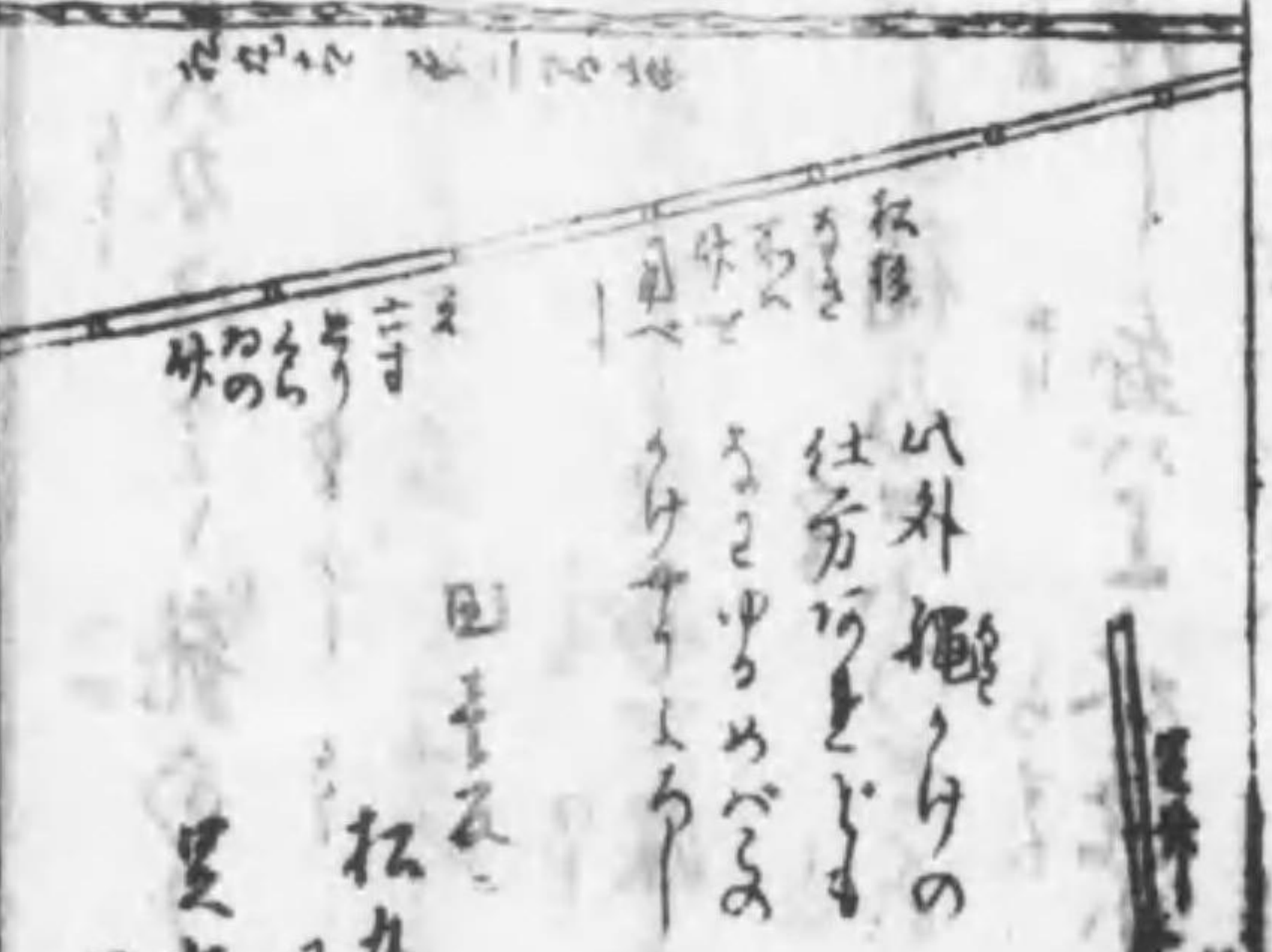
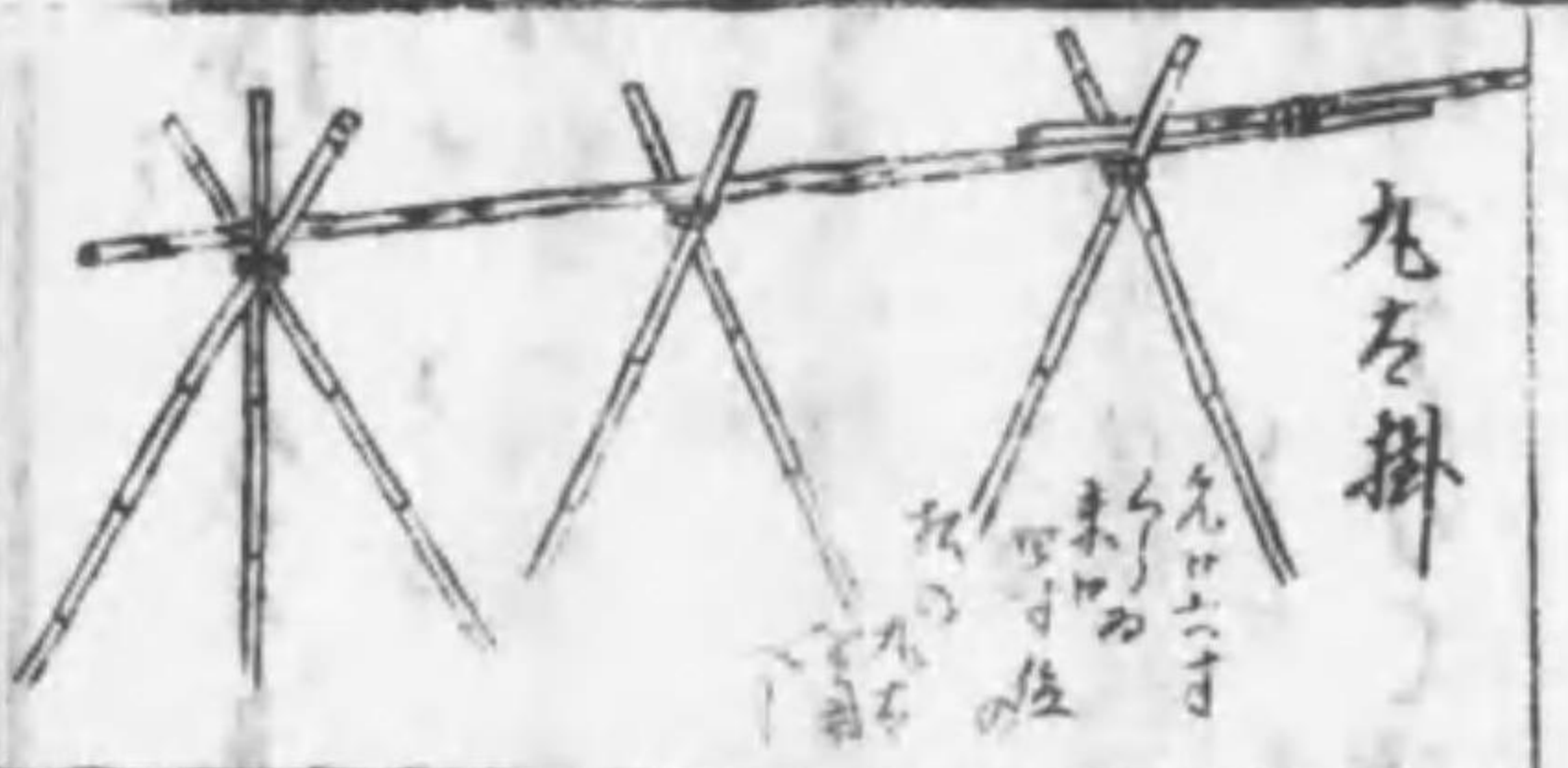
初て掛干に申すことにはありぬ主人 予小考く是なる
 ハ吾交配合彩田凡百町余より物も小武百石は倍
 収米多くなじのををくはいつも同侯丹賣し近村
 を石月張三ぬりりへ並上しして仲實の者競を賣
 中りにありたり是を今く其秤乃進名よりのてあり
 いしよろこまきしりりりるを涼田八十て掛て干し之
 ともそ解ハ掛て干事あると不も夫し出相辺の雪
 國ハ初て掛て干し又歳内辺おてもむりしりはあれ

土ひこし又湯乾しなりを乾し干澤とす
土ひこしは土を乾かす事なり湯乾しは湯に乾かす事なり
 吹よけ金へ大丸の懸て湯乾しなりを乾し干澤とす
吹よけ金は湯乾しを乾かす事なり大丸は湯乾しを乾かす事なり
 日小見ゆととも大陽を乾し一まき湯乾しハ綿乾しと目小見ハ
日小見ゆとは湯乾しを乾かす事なり大陽を乾しとは湯乾しを乾かす事なり
 陽氣盛人みして乾しなりを乾し干澤とす
陽氣盛人は湯乾しを乾かす事なり人みしては湯乾しを乾かす事なり
 の下なる地へ日乃物干車一運く又西へ乾しふくしとあり
下なる地は湯乾しを乾かす事なり日乃物干車は湯乾しを乾かす事なり
 乾く古みトウ丸のまき地乾しに蒸るんハ偶々豊
乾く古みトウ丸は湯乾しを乾かす事なり地乾しは湯乾しを乾かす事なり
 熱したるも終る一故小都て箱を刈てハた小園
熱したるは湯乾しを乾かす事なり終るは湯乾しを乾かす事なり
 すりし運小掛てあり一
すりしは湯乾しを乾かす事なり運小掛は湯乾しを乾かす事なり
 ○掛干其の名と信據ともなり
掛干は湯乾しを乾かす事なり其の名は湯乾しを乾かす事なり
 ○畿内とてせと去たてとま小園迎てハたさとりありハた
畿内とは湯乾しを乾かす事なりとてせと去たては湯乾しを乾かす事なり



箱川
 掛干
 土ひこし

とハ葉の根ノ味ありて勢氣ありて目にはなるも之
にさき此野鳥根の方小根を束十か小束入る程に
ハ抱えてよけし能べし



獲収速利不利之論

或取稻を刈て田の中人
比也上付て干而取り又刈て
又刈て其苗一面よむらげ三日も干て
らひ稻を棚と唱
一面小川干たりりきハ雨
雨する時ハ水も浸

とも云如く甚不利なり物も住たより其如く住まを
 ぼちんはそは中より地所はるれりのし心持居之を振
 の不乃人ふるを御て干さる中と向へ麦畑有ふおくらぬ
 その中うちまのりつりゆは居るとぬをそよまてを
 への所は掛干ふをそよの考ふれまへの振りまともおら
 麦府ふの便利あり先づ登るまを又の田さるへ斤福乃日
 あたもよな右二畝取ふたててまつひ甚不より掛干
 干べしたをそよ八畝の地めまぬとへおくらも耕し麦まて

振の株はべし其掛ておしたる稲はそよおふらく干揚る
 ちりとの時自家お宿ひぬり婦女をれまへの所てふひ扱
 へし又夜るへおもおまふ之勿後深田へ必は掛干はすじ
 ○掛干たは振穀一日不して収納をもよし又穀干せば
 ともるるしくん地をよ干なる穀は三日も干さずと扱
 事一あつたは秋の十月のちりおまをへ時雨うらりかて
 三日干んと思つて五日もうらぬ世も古と掛るは附乃
 手間と入者の心よらうらふまをて掛ておら方のちり

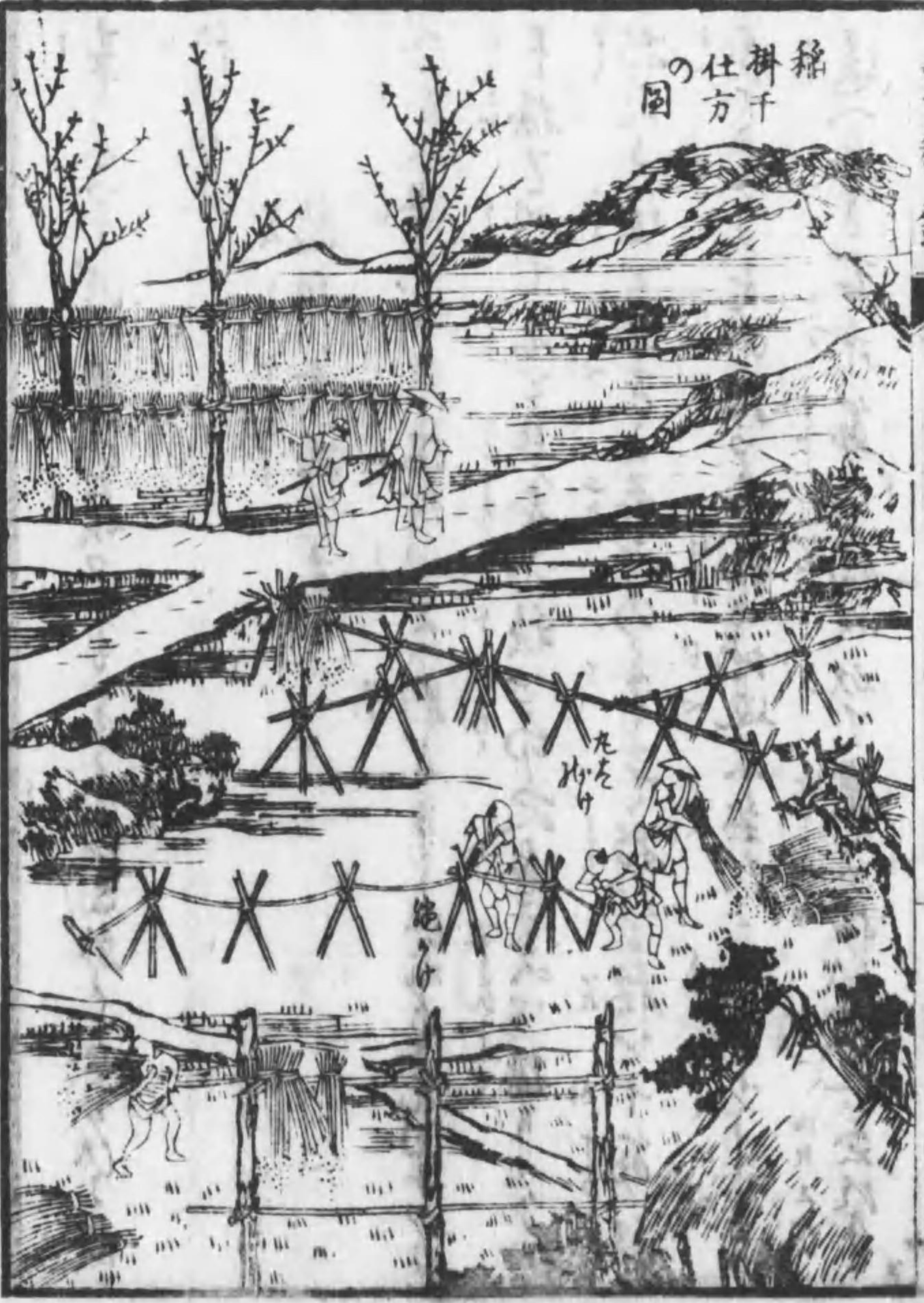
ともくまぐししてその條乃利方あり ○右よ云田よて
 扱歩彦の木の湖へ三日先乃もるを見所さねへ
 うり飛一偶天皇と見合せの日の稲刈りへ一又
 を多く雇入置候よ十月乃もるも六枚の買ふら
 して雨ぬる時ハ徒よ手當と空しくして見合て日と
 延一居内刈旬を多ひ麦地の植へ手配り候一
 一何り世掛干んが一の雨もよても藁を看してうりて
 だてよるるゆりまは六日よてよくバ日和と見合を候

事もつべ仕業の積りもよりのつと外くおひは
 利あり

稲刈干振之事

だてお掛ておひ稲刈よハ別よるひなり先田より
 多振り刈て元と身寄お積と向之を又一振りうりて
 おたる鎌と地をよとよのそおたる稲と十節
 分てたりとの地よと初め地辺よとよとよと
 遠へとよと右才節の稲刈て東よと地辺とよと

稲耕仕方の圖



其如く志てゆけハ別々東のり及び北を右捨を左
 きて結たる稲の穂先を一本一本とひ扱ふやうに
 ○扱刈まりて干し時の外扱は少く少遠之て
 たる東のりも自然に穂先ニツと糸を之を
 小まなげ干す一〇二三日を以て株割とてやしたる稲の
 株を互に手おしておしりむらむらとて山依の尻上
 扱ふして東と先づり結くゆへにさきと色ハ株干揚
 小まなげ稲の乾れよる一此株よりおろす時の扱乃

乾と悪しれのもろくば風吹ふの稲を吹落しん患あり

掛干にそとバ利方好修

第一御車貢上納米おして除米なく圓米よす

小虫身患いありいんしきと地を干は上に米た

方の板乾きこよんとも地よ分たふへ節浦小

云都く地をよ蒸して乾さゆは是を急ご指立納

はるもよバ蔵乃肉めてるまがりの米より蒸せ

うけて虫成生ばる米必蒸たうは掛干ふりたる米

へ存かむるも干揚りたる必蒸生質志まりて堅く

濕氣をほくりりるたよバ蔵まで虫成生ばるの米よ

あり又ハ圓米の風透あり蒸せて邂逅虫成生す

はるりりりも地辺干に懸るハ云々もより米乃減方

存ハるを俵めて三升小減しとらを掛干ハ三升小

減へるも甚減さるる減りつて五升多るる小西園東

北の園より大阪府小積登る米を急ぐ掛干に云々

らハ減すくもよ米乃性なるもハ車後ハ拔翠よ

諸國少く苗代するて見およぶ多く田圃小なる
 不多し一年くつて前庭より之一年毎ふ所をか
 ゆるとさい苗肥てすも中に生長に根もまげく
 田圃うらひよよく肥て葉を葉に伸方も宜し
 ○一畝よ苗代の土を耕はりて水とあてたむこれ
 葉は骨で細くに刻とよく踏らる地とあし
 つけば田圃うらひし後畑生ゆるそあしと去り
 此口傳あり

○又一畝苗床の葉を耕し並塊を能く
 保ふ畦と立水けすも中ふわけで先南塊は
 中ふりて並前付の時中ふり塊で細くに碎さ
 土とあし水と入高低とあしと敷てす
 ありきと九州をよみて山芝と刈りて能く踏
 こも上土と藪分を入てあしと芝は枝出さる
 土とあし下れすもあし中ふりて敷て前
 ○又水よ入る多く稲もよく収ふむとあし

是のいあ〜水を入れて、踏むる中らにすべ〜と扱は
の小西氏もつら

○扱て前といふは、府方利あり〜秋の種早
くつて、実のりもよる〜前付て後七日をりして
干一日能日種ふりつた〜るは、水とついで
干に及むべり〜干や香るふりて水とついで、再い
は〜あぢい〜実干二日とかざり〜○は〜
たる〜雨ふり〜水と入れば、雨の

は〜てり〜○生ぬ内水で流〜つ〜雀鳥よ
啄〜さ〜用心あり〜生て後水と流〜す
〜らや〜なめあり

○田と扱〜、國雨〜、り〜ま〜が〜
魚老の志あるあ〜、れ〜ま〜と〜
紀すあり扱田と扱〜に、流沙の輪何れ〜も苗と〜
〜は、立流〜、利あり流〜る苗は
〜中に根十分〜、上〜もよく種〜

たつにつり合あひよるれば実みのりてたてりていふ
 たてれぶきばあかすあいりていふ

○早魃うんと熱あつる地ちはあかま苗代なへとあいりていふ
 水みづあまるあるあ成長せい長ちやうなる苗えで水すい中ちゆうに植うむばいえるあ本
 水みづは育そだつあ性せい質しつあままあ生おくあ速すみあま何なにあまの
 早魃うんなるあもかあてあてあ丸まる苗なへ床とこふあすあまあ地ちは
 上畑かみであ掘あぶあべあいあまあ上かみ田あふあおあてあてあびあ畑あて
 府あてもあよろあい



畑あのあ苗代なへ
 水みづあまるあるあ



水みづあまるあるあ
 苗なへをあ田あにあ植うむあ

豊穰成図

○前年耕一塊とよくうごたやうりうりよて立おこ
 前づきとれた引おろし一すの塊と細くに碎と糞
 水と打ふりして糶三日ほど水につけ垂て前づ
 水と土の雨とを糶度れととり日小乾く一うぬ
 うにうごき湿気おとすおろしこいよ小土漬いと仕垂
 灰小屋ぶぐに入並糶すまゝしてまゝと一うづ
 灰と和し糶の上よりふりうけて土漬ぶぐ一高進
 足合祀一志て育きお勢いよく生え五りのふりた

低田の水多くて乾くてもおき地少とぶぐ一畑少
 そとてたる苗されば始終水少は通一の雨の知る
 糶換すりの之お水とぶぐして干さる一あり
 植屋一
 ○揚州國伊丹の近き少て右より苗代も
 水とぶぐ一又一入金雨少て干より糶多くほ
 苗とぶぐ一久植る之此お干半ハ本植して早魁
 小苗のつらぬざる用意ありとぞ又本植して一

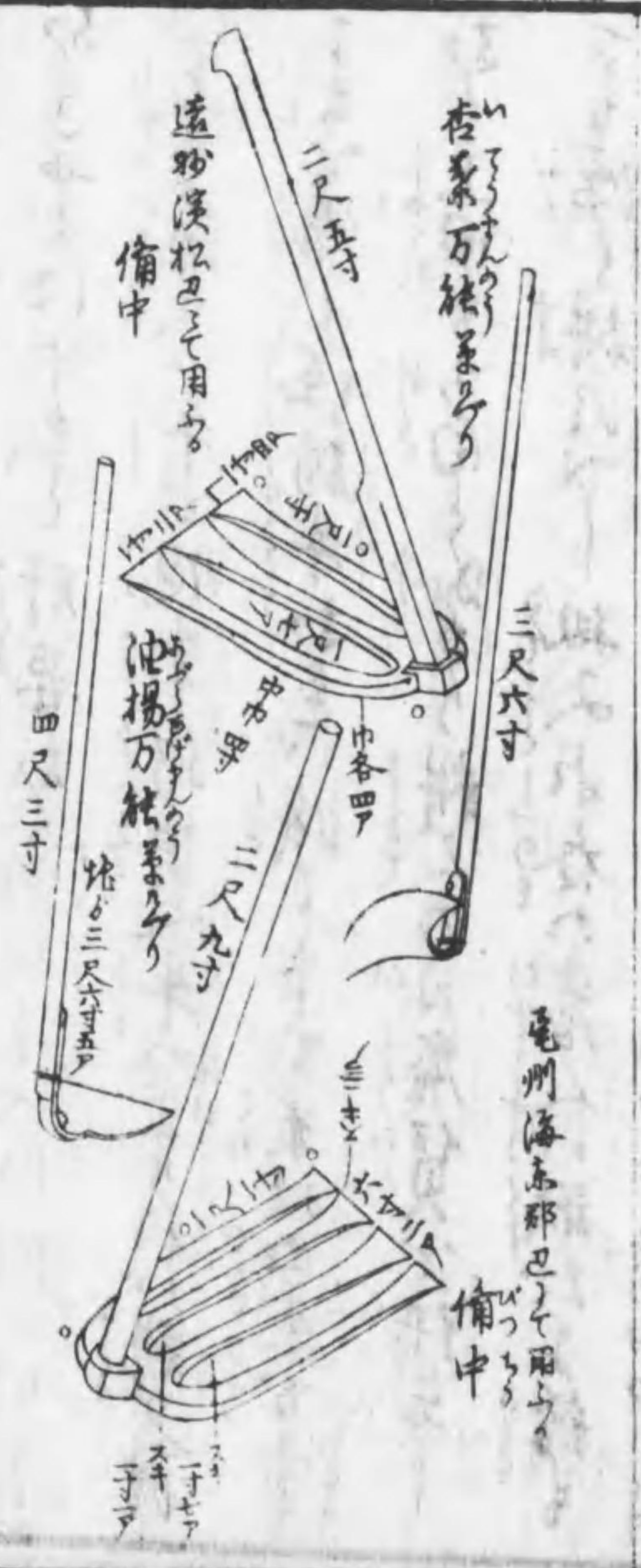
糸ふるらるるおれもほかりきておそく刈る
いさー米多く春魚りあく昭ふ禁るふ味匠
あつれども麦蒔揚よりきば一脱ふを論ど
麦とゆうざる地又いふよと作地をいふ
おそく刈る

高橋の車

畑ぐられ地とて田のすくおとあを高橋を極べ
種まらるるつろつろと稔あり精りの農業全むあ

占城稻ハ精めて米白く粒太しつろ九州あ
此精稻とぼんじんとて作まる併ふ精ます
粒を食して味よく種くして病人食してはの
つろとあー稲の種乃とささきと武三すあ
さかきさく若の紫れとー又粒とて常稲の
さつり其外種粒もつろとー叔母作らやハ農業
全書高橋の條をにくつろとささきとあ
作るー種分田稲ふつろとべ収納つろのみと

魁^セてつうよよ去^ク深^シ耕^クて官^カつてつうと尾^ビ二^ニを
の國^{クニ}で用^ユふる備^ビ中^{ナカ}の定^{テイ}規^キと唱^ナく大^{ダイ}形^{ケイ}で去^ク
よつて便^{ベン}利^リ官^カとす^スてつうと尾^ビ二^ニを



此^{コノ}形^{ケイ}の通^{トウ}し作^サせつてつういなり^{イナリ}のま^マ○す^スて若^ニ
具^クのき^キろくとき^キれ^レざる^ズとて一日^{イツニチ}一年^{イツネン}一生^{イツセイ}で務^ツま^マ
たる^タる^ル。換^カ徳^{トク}り^リ歳^{サイ}内^{ナイ}の農^{ノウ}人^{ニン}の農^{ノウ}具^クと^トも^モし^シから
ふ^フろ^ロに務^ツま^マよ^ヨれた^レ中^{ナカ}に作^サつて用^ユふる^ルと^トも^モし^シから
東^{トウ}北^{キョク}の國^{クニ}と^トも^モし^シから^カら^ラい^イ細^ホた^タふ^フ用^ユひ^ヒざる^ズ。亦^{モト}つ^ツて農^{ノウ}具^ク
あ^アら^ラも^モあ^アら^ラい^イと^トも^モし^シから^カら^ラい^イ疎^ソろ^ロろ^ロる^ル。最^{サイ}近^{キン}が^ガ負^フる^ルに^ニも^モし^シから^カら^ラ
の^ノ是^{コノ}具^クを^ヲけ^ケき^キば^バ家^カ造^{ゾウ}り^リい^イ出^デ来^{ライ}が^ガ一^{イツ}又^{モト}武^ブ家^カあ^アら^ラ
い^イ勅^{ツク}道^{ダウ}具^クと^トも^モし^シから^カら^ラい^イぞ^ゾろ^ロい^イざ^ザら^ラい^イと^トも^モし^シから^カら^ラ

がくしとてのりくきくは農具もくを用ふ
まが調いざることもありて農具の更はずが著
しなる農具便利簿小又合符一

○地簿と鉄先少とせしむる又いささくづかす

めすすしつ少もお田畑と磨くせんとするの
りるを聞およぶるは益減小増りたる罪人なり

下ごにそく子益減とありて変配したるは又
りる所少の家小さぬぐの變後すすすに身よ

務もふさ中しにさうたり又去る所小そく子狂人か
まらるるを軍及ぶるは益減とありていさくづかす
の才一なり

○農家としての十回入才以上の息子娘ふを田舎小

つふすのりり作るとて家小で作らぬ外に種穀
ののて作らぬ一も代耕でつぐり並入用文

づいづいをいづべ一又年季を人しはか
て付打く結とあすするは因トくは中らり作ら

おもひにけし油の燈火大款たもつりい受の
 米の多きを沖方れ由より米とあるより一もつり
 子國少て油の元大切ありて他國へ出さば田の肥
 しに用ひたきりのあり杞一杞の中用ひるは
 手取れ農家ふくくくあること
 ○さて此砂地の畑の莖芥を種はく之はまよ
 くらりたるをたつりより種を切つてくらりたる
 篩あて通しきくも木杭をさき中へいして

年々も畑へ入る一此のりのれ松とてそは後入を
 杞一とたりら作物よほごうくらり大坂より
 泉州場道の海子本津難波橋間住者大和川を
 往昔海と入て海砂おれども大坂少て持る所
 ちりりたて目もぬもこび山れごつて移るる
 らりして右ついでく松とありて畑は入野菜綿
 藍とて作るに地は増りて足中あき多くうもて
 ぐるもあり是を考ふるも作物の農人の情

カによつて終つたり

此附録は元禄の事なり

あつては詞なり

べつとて用ひたり

激きもむ

豊後録附録終

曲京三條通升屋町

出雲寺文次郎

同寺町通松原下ル

勝村治右衛門

大坂心齋橋通北久太郎町

河内屋喜兵衛

同安堂寺町

秋田屋太右工門

東京横山町一丁目

出雲寺萬次郎

同日本橋通壹丁目

須原屋茂兵衛

同芝神明前

岡田屋嘉七

同馬喰町四丁目

吉田屋文三郎

書肆

終